

# ほなほ歴史通信

第103号

2022(令和4).6.1

## 山間地帯の特性を活かした新たな挑戦

―「茨城県北ロングトレイル」プロジェクトへの期待―

日立市、常陸太田市、高萩市、北茨城市、常陸大宮市、大子町の五市一町から構成される県北地域の人口減少や高齢化の動きが止まらない。それは、昨年公表された二〇二〇年(令和二年)の国勢調査の結果からも確認できるし(ちなみに、大子町の五年間の人口減少率は二・八%で県内第一位)、また国立社会保障・人口問題研究所の人口推計によれば将来にわたっても大幅な減少が続くことが見込まれている。当該地域の活力をいかに維持し、地域としての持続可能性をいかに高めていくかが喫緊の課題となっている。

そうしたなか、森林面積が約七割を占める当該地域の特性を活かしたプロジェクトが現在進行中である。「茨城県北ロングトレイル」である。ロングトレイルとは「歩く旅」を楽しむために作られた道のことで、「登頂を目的とする登山とは異なり、登山道やハイキング道、自然散策路、里山のあぜ道、ときには車道などを歩きながら、その地域の自然や歴史、文化に触れることができる」(日本ロングトレイル協会ホームページ)、これが魅力だという。

当プロジェクトのきっかけは、水戸市でアウトドア商品の専門店を営む和田幾久郎さんが茨城県に提唱したこと。二〇一八年に県、県北六市町、和田さん達で研究会が発足し、翌一九年に県が関連予算を計上してコースの設定や種々の整備が本格化する。二

〇年九月時点でのコース案をみると、六つの市と町に連なる山々を一本の道でつなぐ全長は三二〇キロ(東部エリア北約七二キロ、東部エリア南約四一キロ、南部エリア約三六キロ、中央部エリア六八キロ、西部エリア北約四八キロ、西部エリア南約五五キロ)にも及ぶ。国内のロングトレイルとしては屈指の長さである。二一年二月には「茨城県北ロングトレイル」が正式名称となり、ロゴデザインも決定された。そして同年三月、中央部エリアの一部、大子町月待の滝から生瀬富士を経由して袋田の滝に至る一四キロ区間が、また本年四月には袋田の滝近辺から常陸太田市の竜神峽を経て天下野集落に達する約三九キロ区間が開通した。合わせて五三キロ、全コース完成までなお先は長い。確実に延伸の実を重ねている。

マップの作成や標識の設置、倒木の除去や下草刈り等々のコース整備に当たっているのは、県から委託を受けた和田さんと茨城県北ロングトレイル協力隊の面々。この協力隊は、地域に根差した新たなトレイル文化を創出するために組織された有志の集まりといわれ、現在の登録者は約五七〇人に及ぶとか。毎月二回、有志が集って整備活動に汗を流している。コース整備にとどまらず、「トレイル文化の創出」という息長い活動を意図している点が興味深い。また、当プロジェクトの情報WEBサイトをチェックすると、県北六市町に点在する様々な地域資源を結び付け県北全体の魅力を誰もが体験できるようにする、繰り返し訪れながら多様な地形や眺望を味わえるようにする、どこからでも始められかつどこまで歩くのかも自由に選択できるコースにする、以上のような考え方が浮き彫りになる。いずれも、本プロジェクトを地域全体の活力醸成に昇華させるうえで欠かせない視点である。

行政の支援と和田さん達のもつ民間のノウハウ、ボランティアの力が見事に結集したことが今日までの推進力となっている。この連携の輪がさらに広がり、深化し、ロングトレイルに連動して生まれる様々な可能性が形になることを期待したい。(齋藤典生)

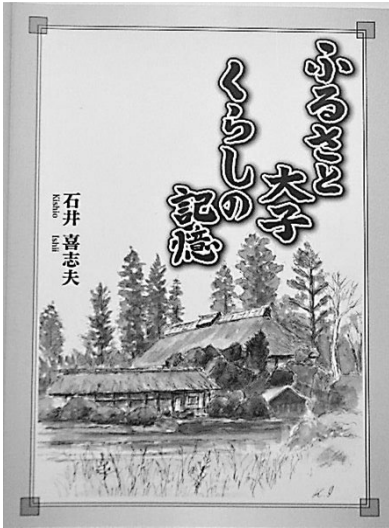
## 記憶と記録に触れながら

— 『ふるさと大子 ぐらしの記憶』 編集後記 —

横倉要次

このほど亡き義父（以下、父と表記）石井喜志夫の著作をまとめて、『ふるさと大子ぐらしの記憶』を上梓いたしました。生前父は、大子町歴史資料調査研究員や大子遊史の会会員として活動し、本誌『ほない歴史通信』にも、たびたび原稿を掲載させていただきました。また、本誌第七一号では、追悼の特集を組んでいただくなど、ご高配を賜りましたことに改めて感謝申し上げます。

さて、本書をまとめることになった経緯を紹介します。父は教員退職後に、家族向けに手作りの自分史を作成しました。生い立ちや少年時代、戦時中や戦後の生活、教員時代の出来事とともに、当時の農村の仕事や産業、農家の行事や習慣などを、水彩の挿画も添えて詳細に記していました。これがもとになり、本誌で連載させていただいた、学校や農家をテーマにした各シリーズが生まれました。また、父は社会科の教員で、『大子町史』の編さん事業に関わったこともあり、ふるさと大子の歴史に愛着を持っていたように思います。地元の史資料の掘り起こしと、収集および



調査も進めていたようです。それらの成果の一部は、本誌はもとより『広報だいいご』内の「大子の歴史散歩」などで、随時紹介していました。これらの原稿や著作物を整理し、自分史内に収められた未発表の内容も含めて再構成し、一冊にまとめ

たのが本書です。特に、父が描いた挿画はほとんどが彩色されており、カラー印刷で残したいという企画の意図もありました。

次に、簡単に本書の構成と内容を紹介したいと思います。

○「学校昔シリーズ」

小学校時代を過ごした佐原小学校初原分教場の思い出を

もとに、当時の学校生活の風景や子供たちの姿を記録

○「昭和の初めの頃の農家の仕事シリーズ」同 農家の行事シリーズ

同 農家の工夫シリーズ

少年時代と青年時代を過ごした佐原周辺で、見たり聞いた

りしたこと、体験したこと、記憶をもとに、昭和前期の県北

山間地域の農村風景や仕事の様子、人々の生活や行事を記録

○「大子の歴史散歩シリーズ」

江戸時代から昭和初期にかけての文書資料や史跡、出来事

や史実などを取り上げ、先人の取り組みや思いを紹介

本書をまとめるに当たり、筆者も父が取り上げた史跡や場所を、

可能な限り訪ねてみました。歴史散歩シリーズで紹介した洪水の

教訓を伝える「可恐」の碑が、町内には三基あるようですが、令

和元年（二〇一九）十月の台風被害を後世に伝える石碑が、新たに

久野瀬の諏訪神社入口に建立されていきました。また、父も保存を

願っていた町内に残る小中学校の木造校舎が、平成二十六年（二

〇一四）以降、次々と国登録有形文化財になったことも知りました。

歴史に学びそれを伝える活動や、歴史や文化を大切にして活用

する取り組みが、脈々と受け継がれている状況を、きつと父も喜

んでいると思います。町外出身の筆者ですが、父の記憶と記録に

触れながら足跡をたどり、そのようなことを感じました。

大子の歴史や文化に触れるとともに、亡き父の活動の一端や思

いを知ることができた本誌『ほない歴史通信』に、重ねてお礼申

し上げます。本誌の益々の発展と充実をお祈りいたします。

（常陸太田市内在住）

『図説 茨城の城郭 3』を刊行しました

青木義一

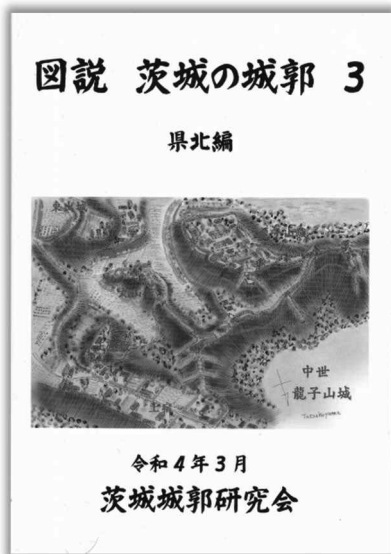
藪をかきわけつつ茨城県内に残された城郭を訪ね歩いてきた茨城城郭研究会は、今年三月に『図説 茨城の城郭 3』を刊行しました。大子町の城郭は、前二冊『図説 茨城の城郭』『続 図説 茨城の城郭』で月居城、町付城等十八城を紹介していますが、本書では最近確認された城郭も含め、新たに二十三城を紹介しています。

大子町は袋田の滝や男体山などがある風光明媚な町ですが、戦国時代は金が採れたことから、佐竹氏と白河結城氏の間で激しい争奪戦が行われ、多数の城館が築かれています。町内に存在する城館が、その戦いの生き証人です。

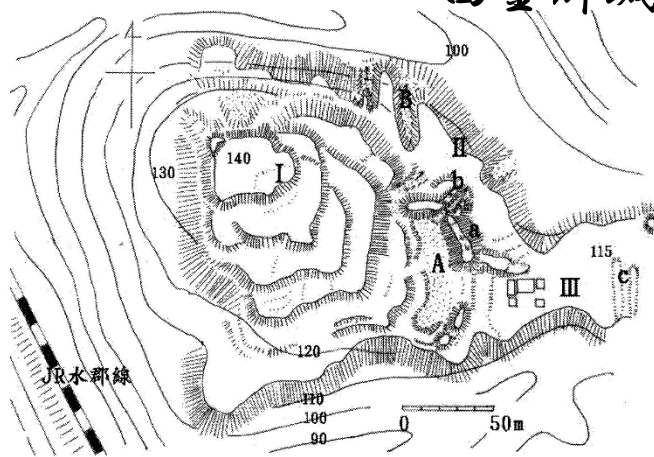
その時代から続く人達の子孫も今も多くおられます。本書は茨城県立歴史館、常陸太田市郷土資料館にて一〇〇円で販売しております。本書を通して先祖の人達が生きた時代を偲ぶのは如何でしょうか。

大子町では今も続々と新しい城郭が確認されています。これらは続編『図説 茨城の城郭 4』等で紹介していきたいと思えます。

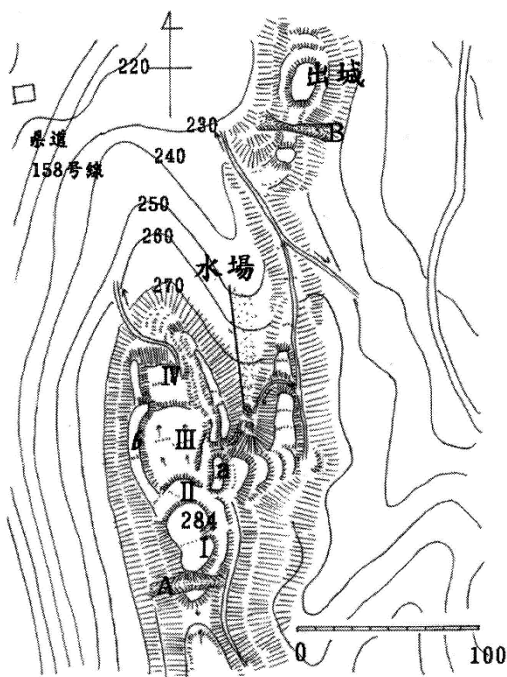
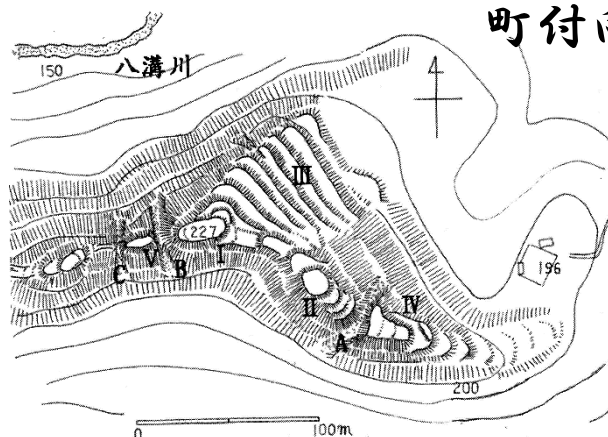
(茨城城郭研究会)



西金御城



町付向館



相川要害

大子町に残る城郭を縄張図とともに紹介しています

## 庶民の教育と筆子塚の碑

下重康男

江戸時代の庶民教育は、どのような状況であったのだろうか。『大子町史 通史編 上巻』によれば、通常は寺子屋などで行われていたと言う。しかし、寺子屋や私塾などでの教育の様子を示す記録はあまり残っていない。まして城下町から遠く離れた辺境の地の庶民は勉学の機会にすら恵まれなかったと思う。

しかし、大子地方にはそれなりの寺子屋や私塾で勉学する機会があった。その一端は、筆子塚の碑、私塾依上芦野倉三光院、同じく依上塙成明塾、大子の郷校文武館などから垣間見ることができ

る。そこで、筆子塚について述べてみたい。筆子とは、勉学に勤しむ子弟を指し、亡くなった師匠を偲んで筆子たちが建てた碑を筆子塚と呼んでいる。例えば、黒沢中郷の大雲寺（町付慈雲寺末寺）の傍らの観音堂境内にある幕末期の筆子塚が知られている。

今回紹介する筆子塚は、今より二百二十数年前の寛政九年（一七九七）の碑である。その場所は、下野宮生手内から、新発見の中世の板碑のある産土秋葉神社前より水郡線陸橋、久慈川赤橋を渡り茨城大学研修所右隣り路端にある。かつて烈公が水府村高倉の安寺持方を巡視したおり、烈公は地元民の質朴の風習と精農ぶりを感心し「百姓に学問はいらぬ。手習いは農耕の妨げになる」と教示したと言う（石井良一『奥久慈膝くりげ』）。このように百姓庶民が勉学に取り組む環境にないなかで、辺境地の庶民百姓の子弟が筆子塚を造立したことは驚きである。

次に、筆子塚碑の内容を示そう。現地に建てられた説明碑には、次のように書かれている。

この碑は、今から二百十九年前の寛政九年（西暦一七九七年）筆子中が造立した。恩師匠の一周忌供養碑である。悲しいかな、昭和三十年代頃不逞者による倒壊、その後、道路改良と共に路傍に放置された儘今日に致る。誠に忍び難い。往時どのような事情か定かでは無いが、この辺境地で「読み書き算盤」など、その教えの功労に感謝し、ここに金剛山慈雲寺五十世中山龍雄住職により奉供養する。

### 記

出身地 奥州三春領（福島県三春町）

戒名 転識成智清信士

俗名 宗像本庵忠恕

没年 寛政八年十二月一日

造立年 寛政九年十一月一日

維時 平成二十八年十二月吉日

施主 桐ノ草 命 下重 勇

〃 舎 下重康男



右側が筆子塚の墓塔  
左側が説明碑（下重康男撰文）

この碑から、下野宮の地に奥州三春出身の寺子屋師匠がいたことが明らかである。この寄稿文を書きながら想起したのは、水墨画の巨匠雪村が亡くなった地が三春であったことである。

（大子町下野宮在住）

大子町・鎮守の杜(一一二)

羽黒神社(大子町上金沢二二八)

高根信和

JR水郡線常陸大子駅から押川に沿って国道四六一号を走ると約六キロメートル、相川口の左側に羽黒神社の社号標と鳥居が建っている。ここから徒歩約五分で、神社の境内に着く。そこには羽黒神社・松尾神社・稲荷神社の記念碑、拝殿改築記念碑、当社手洗願主塚田奉納石碑(寛保元年)、庚申塔が建立されている。

両部型の鳥居の前には願主塚田律男奉納の石灯籠(大正三年三月二十一日)、五段の石段を上ると拝殿に着く。拝殿は流造の鉄板葺、間口三間半、奥行二間の約六坪。拝殿右手には神輿舎がある。本殿は、拝殿裏手から二五五段の急な石段を息も絶え絶え上ること約二〇分の所、切り立った巨岩の上にある。そのためか、別名剣ヶ峰神社とも呼ばれている。本殿は、巨大な岩盤上に建てられた覆屋の中にあり、東南向き、流造の木羽葺、方一間である。江戸時代の社寺建築について学ぶべき個所が豊富で、見事な建築手法や彫刻を間近に見ることができる。

本殿左手には末社稲荷神社がある。内部に保管されている棟札を見ると、寛保三年(一七四三)、宝暦十年(一七六〇)、嘉永二年(一八四九)、安永三年(一八五六)、明治十二年(一八七九)、昭和八年(一九三三)の六枚が残っており、屋根や土台の修理歴を知ることができた。

また、本殿への石段を上る手前の参道を奥に進むこと約二〇メートルの所に、末社松尾神社が鎮座している。建物の規模は、前記稲荷神社と同じである。当末社内には八枚の棟札が残されている。その一部を紹介する。

安永九庚子年奉三月吉祥日、寺社奉行渡辺九左衛門、伊藤佐

市衛門、庄屋塚田六郎。組頭綿引左衛門、國谷□□、藤田□□右衛門。惣産□□。奉修葺松尾大明神。別当万学院法印恭覚(裏書)(梵字)常州久慈郡上金沢村劔之峯末社

これは、安永九年(一七八〇)の修理の記録である。なお、『茨城県神社誌』には、これら二社のほかに末社として浅間神社、天満宮、淡島神社、金比羅神社が紹介されている。

羽黒神社の祭神は倉稻魂命(うかのみたまのみこと)で、伊弉諾(イザナギ)、伊弉冉(イザナミ)の子である。衣・食・住の神、幸福の神、商売繁盛の神として広く信仰を集め、稲荷神として古来より数多くの里人が参拝した神社である。

『茨城県神社誌』に掲載されている「社伝」によると、松尾神社は延暦年間(七八二〜八〇六)の蝦夷遠征の折に、坂上田村麻呂が近江の坂本神社の分霊を移したものと伝えられている。また、蝦夷を征服した帰りに田村麻呂が出羽の羽黒神社に立ち寄り、その分霊を祀ったのが当羽黒神社の謂れとも伝えられる。

羽黒神社の例祭は春三月、流鏝馬の神事が行われる。神紋は左三巴紋である。当社の本殿は羽黒山頂に、山麓には拝殿が鎮座している。全山が杉林で、鎮守の杜を形成している。五月の取材時、山頂の本殿からは北、南、東の方向に田植えが終わった水田を見下ろすことができた。あたかも、神が人々を見守っていてくれる神域のような景観であることを実感する。(水戸市在住)



本殿



拝殿

## 炎と闘う男たち (三)

大金 祐介

本稿では、前回に引き続き、県下随一と評された大子町第一消防組の歴史を紹介したい。

大子町第一消防組は、明治二十七年（一八九四）の設置以来、消防ポンプとして、腕用ポンプを装備していた。腕用ポンプは、その名のとおり人力を動力源とするポンプである。同じく人力を動力源とする江戸時代の竜吐水やその改良版である雲竜水に比べれば高性能だったが、人力を動力源とする以上、放水能力や放水時間に限界があった。

明治末期にガソリンエンジンを動力源とするガソリンポンプが登場すると、多くの消防組から注目された。当時、動力源が機械化された消防ポンプといえ、蒸気機関を動力源とする蒸気ポンプだったが、ガソリンポンプは、その蒸気ポンプよりもはるかに小型で取り扱いが容易だったのである。多くの消防組がガソリンポンプの導入を計画したが、大子町第一消防組もまた消防力の向上を目指してガソリンポンプの導入を計画した。

ガソリンポンプを導入する上で最大の障壁となったのは、その価格だった。腕用ポンプが一台五百円前後だったのに対して、ガソリンポンプは一台二千円前後と非常に高価だったのである。消防組規則では、消防組に関する経費は市町村が負担することとされているが、当時の大多数の市町村は財政的な余裕がなく、大子町もまたガソリンポンプを導入できるだけの財政的な余裕はなかった。そのため、大子町第一消防組では、外池太一郎組頭らが金策に奔走した。その様子は、次のとおり『いはらき』新聞の記事からうかがうことができる。

「●大子に新唧筒 大子町第一消防組にては去る廿九日外池組頭小頭以上大子署に参集夜警開始其他の件を協議し宿題たりしガソリン唧筒を購入するに決し組の基本金及寄付金を以て三千円を調達し大子区に対し千五百円の補助を交渉する事となりたり」（大正十年十二月四日付け第二画）

「●大子に新唧筒 大子町の懸案たりしガソリン唧筒は愈四日バルブレス式十八馬力一台購入するに決したるが費用は半額を区より補助し残半額は組基本金及寄付金にて補充する筈なり」と（大正十一年二月二十日付け第二画）

外池組頭らの金策が奏功し、大正十一年（一九二二）六月、消防組基本財産からの支出、有志者からの寄付、大子区からの補助などにより、大子町第一消防組第一部、第二部、第三部にガソリンポンプが導入された。

その後、大正十五年五月二十日に新設された第五部（栄町）には新設とほぼ同時にガソリンポンプが導入され、昭和四年（一九二九）十一月五日に新設された第六部（愛宕町）には五年一月にガソリンポンプが導入された。そして、残る第四部にも六年三月にガソリンポンプが導入され、大子町第一消防組が装備する消防ポンプは腕用ポンプからガソリンポンプにすべて置き換えられた。

『茨城消防発達史料』によると、少し遡るが、昭和四年度末において、茨城県内の消防組が装備する消防ポンプの台数は、二百十八台だった。このうち動力源が機械化された消防ポンプ（ガソリンポンプ等）は、僅か百五十八台で、全体の七％に過ぎなかった。最も台数が多かったのは腕用ポンプで、数にして千六百五十台、割合にして七十八％だった。江戸時代の竜吐水や雲竜水も合わせて三百十台が未だ現役で使われていた。このことから、すべての消防ポンプをガソリンポンプに置き換えた大子町第一消防組の先進性をうかがうことができる。

（大子町大子在住）

## 久慈川を利用した御城米輸送の始まり

江戸時代に水戸藩領であった保内では、御城米（年貢米）を水戸まで運ぶ必要がありました。その搬送手段として利用されたのが久慈川の水運でした。保内地方から久慈川に下ろされた御城米は、經由地となる山方河岸（旧山方町）や高和田河岸（旧大宮町）まで船で運ばれ、陸路で那珂川まで搬送された後、そこから再び水運によつて水戸に運び込まれます。

しかし、久慈川水運は使いやすいものではありませんでした。上流部は水深が浅く、石も多いため、江戸時代後期に水運に利用できたのは下野宮以南だけでした（『水府志料』）。山方河岸・高和田河岸まで向かう途中には難所の鱒ヶ淵があり、御城米を載せた船がたびたび破損しています。また、冬の渇水の時期には、水量が足りずに船の使用自体が困難となつてしまいました。このような久慈川による御城米輸送は、江戸時代後期の記録には出てくるものの、それ以前の利用についてはよくわかっていません。江戸時代前・中期の久慈川の年貢輸送について史料から確認してみます。

江戸時代初めの久慈川利用についての記録はほぼ残っており、詳しくことはわかりません。寛永二年（一六二五）に保内（大子）地域で生産された薪が、武茂（旧馬頭町）や長倉（旧御前山村）で生産されたものと共に、那珂川水運で水戸まで運ばれていることから（『寛永文書』）、水戸への輸送にあまり積極的に久慈川水運が利用されていない印象を受けます。久慈川上流部には天領塙や棚倉藩が位置していたため、天和・貞享年間（一六八一〜一六八七）頃から久慈川を使った奥州方面の物資輸送も計画されましたが、成功を見ないままとなっています（金沢春友『水戸天狗党と久慈川舟運』）。

保内からの久慈川を使った御城米輸送が確認されるのは、松平頼隆（水戸藩二代藩主光圀の弟）を藩主とした保内藩が存在した時（一

六六一〜一七〇〇）のことです。頼隆は国許に下向せず江戸に滞在していたため、保内地方からの年貢を江戸まで搬送する必要がありました。保内藩は水戸藩の支藩であったため、水戸城下東部の細谷河岸付近に蔵屋敷を設け、そこを通じて江戸に物資を届けていたようです。水戸城下の蔵屋敷の政務日誌が元禄八年（一六九五）の一年分だけ残されており（『諸色留』（以下「諸」と略）、茨城県立歴史館所蔵「大和田家文書」）、そこに次のような記述が見られます。

保内筋村々方上米粗千式百九拾七俵取立置候分、川水出次第水戸御蔵へ納申度与百姓共申立候（『諸』二月十四日条）

保内筋の村々からの上米粗の取立分を、川（久慈川）の出水次第で水戸の蔵に納めたいと百姓達が申し立ててきたという記事です。二月は久慈川の渇水期であり、出水を待たないと年貢輸送が困難であったようです。本記録から、保内藩の時代には御城米が久慈川を利用して搬送されていたことがわかります。

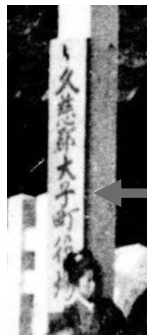
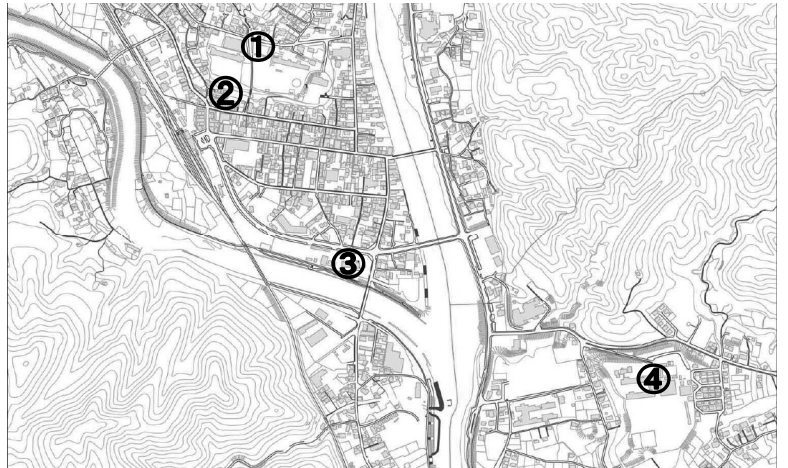
水戸に運び込まれた御城米はどのようにして江戸に運ばれていたのでしょうか。同年三月十日になると北浦北岸の串挽（銚田市）の御船頭久兵衛から、水戸の蔵屋敷に「保内上米」（御城米）の船積のための人足が催促されています（『諸』三月十一日条）。ここから、「保内上米」が串挽經由で船を利用し、江戸まで運ばれたことがわかります。水戸の蔵屋敷に集められた御城米は、涸沼まで水運で運ばれました。涸沼で一度陸揚げされた御城米は串引まで陸送されます（途中で巴川水運を使用した可能性があります）。串挽に集められた御城米は再び船に積まれ、北浦から利根川水運を通じて江戸まで搬送されました。久兵衛が要求していたのは、この時の作業人足です。保内藩の時代には、「保内」（途中陸送）―水戸―涸沼―（途中陸送）―串挽―北浦―江戸―という形での御城米輸送ルートが存在し、保内から水戸に運ばれる途中までの間で久慈川水運が利用されていたようです。保内藩の頃から、制限はありつつも久慈川水運による御城米輸送が行われていたのです。（藤井達也）

# 大子の今昔 写真帳

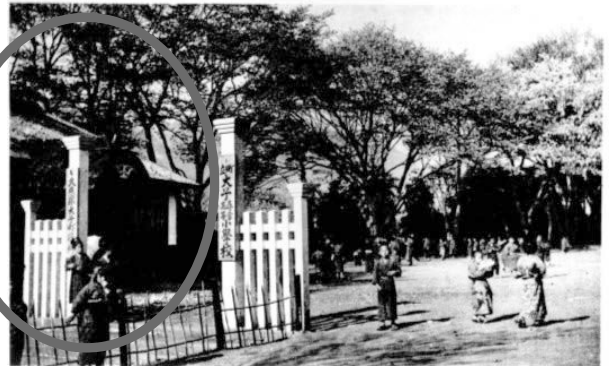
No. 7

## 大子町役場

- ① 明治25年12月31日  
大子尋常高等小学校に隣接して  
新築 所在地：後山  
※ 現だいご小学校敷地内
- ② 大正13年6月竣工  
所在地：本町  
※ 現大子郵便局敷地
- ③ 昭和36年9月竣工  
所在地：瀬戸田 ※ 現在の庁舎
- ④ 令和4年7月竣工予定  
所在地：北田気  
※ 旧大子第二高等学校跡地  
(大金真理子)



(拡大)



① 明治25年頃  
(『大子町史下巻』より)



② 大正13年6月  
(『大子町史下巻』より)



③ 現在



④ 令和4年7月竣工予定

発行日	発行	編集人	編集
二〇二二年(令和四)六月一日	久慈郡大子町大字池田二六六九番地 0295(72)1148	齋藤 典生 藤井 達也 飯村 尚史 神長 敏 江尻 将崇 大子町教育委員会	大子町歴史資料調査研究会 (大子町歴史資料調査研究員) (大子町歴史資料調査研究員) (大子町教育委員会事務局) (大子町教育委員会事務局) (大子町教育委員会事務局)